

## バリデーション・参考資料

- 高齢者が経験してきたもの
- マズローの段階的欲求と見当識障害
- バリデーションのゴールについて
- 解決ステージの段階
- エリック・エリクソンのライフリスク論について  
～未解決の課題と BPSD～
- シンボルについて
- 基本テクニックについて
- バリデーションの過程について
- PBSD について
- 怒りの表出について
- 各ステージの段階にいる認知症高齢者の心理的・行動的特徴
- 認知症高齢者とのコミュニケーション事例
- 生涯発達理論と見当識障害の関係・具体例一覧



(株)東京シティ福祉サービス FC 加盟店

**福岡シティ福祉サービス**

## 高齢者が経験してきたもの

- ・人生の課題や失望に向き合ってきた
- ・希望をもって日々の生活の問題に取り組んできた
- ・自分自身や他人の間違いや失敗を許してきた
- ・目標を達成できないときは妥協をしてきた
- ・失敗やミスをしたり、夢がかなえられなくても自尊心をもち続けてきた
- ・身体的喪失や社会的喪失を乗り越えてきた
- ・体の衰え、愛する人の死、避けることのできない死を受け入れてきた
- ・生きるための情熱をもち続けている
- ・過去をくよくよ思いわずらわず、思い出として楽しんでいる
- ・新しい人間関係をつくる
- ・愛する人と和解し、死に備えてきた

## マズローの段階的欲求と見当識障害

マズローの欲求段階説	見当識障害のある高齢者に当てはめた場合
<b>自己実現欲求</b> (自己のすべての可能性を実現する)	・安らかな死を迎えるため、まだやり終えていないことを解決する欲求 ・安心して暮らす欲求
<b>美的欲求</b> (均整美、秩序、美)	・視力、聴力、身体的自由、記憶力が低下しても、平静な気持ちを回復する欲求
<b>認識欲求</b> (理解、探究)	・忍び難い現実を納得のいくものにしたい欲求 ・整然と、調和している気持ちになれる、なじみある人間関係があり、くつろげる場所を見つけたい欲求
<b>尊重欲求</b> (達成、承認してもらう、他者から認められること)	・承認、地位、自分らしさ、自尊心への欲求 ・役に立ちたい欲求 ・傾聴され、尊重されたい欲求
<b>所属、愛情の欲求</b> (他者と交流する)	・愛され、所属したい欲求 ・人と接したい欲求 ・感情を表現したい欲求、その感情を受け止めてもらいたい欲求
<b>安全欲求</b> (安心、安全と感じられること)	・動かなくされたり、拘束されたりすることなく、育まれ、安心したい欲求 ・痛みや不快感を軽減する欲求
<b>生理的欲求</b> (飢え、のどの渇き、性等)	・触覚、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、性的表出等、感覚を刺激する欲求

ナオミ・フェイル パルデーション・ブレイクスルーより

人生の後半で見当識を失った人は、以下のようなある特定の精神・心理的、そして社会的欲求をもっている

- ・安らかな死を迎えるために未解決な問題を解決したい欲求
- ・平和に暮らす欲求
- ・視力や聴力、身体的自由、記憶力が低下しても平静な気持ちを回復する欲求
- ・忍び難い現実を納得のいくものにしたい。整然と、調和している気持ちになれる、なじみある人間関係があり、くつろげる場所を見つけたい欲求
- ・認めてもらいたい欲求。地位、自分らしさ、自尊心への欲求
- ・役に立ちたい欲求
- ・聞いてもらいたい、尊重されたい欲求
- ・感情を表現したい欲求、その感情を受け止めてもらいたい欲求
- ・愛され、所属したい欲求。人と接したい欲求
- ・動かなくされたり、拘束されたりすることなく、育まれ、安心したい欲求
- ・触覚、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、性的表現等、感覚を刺激する欲求
- ・痛みや不快感を軽減する欲求

これらの欲求を満たすために、

- ・彼らは心の目を使ってものを見る。そうして過去のなつかしい声を聞く。
- ・働いていたとき役に立っていると感じた気持ちを再びよみがえらせようと、働いていたときと同じように手や足を動かす。
- ・言葉で意思疎通をすることができなくなると、言葉にならない音を混ぜ合わせて感情を表現する。

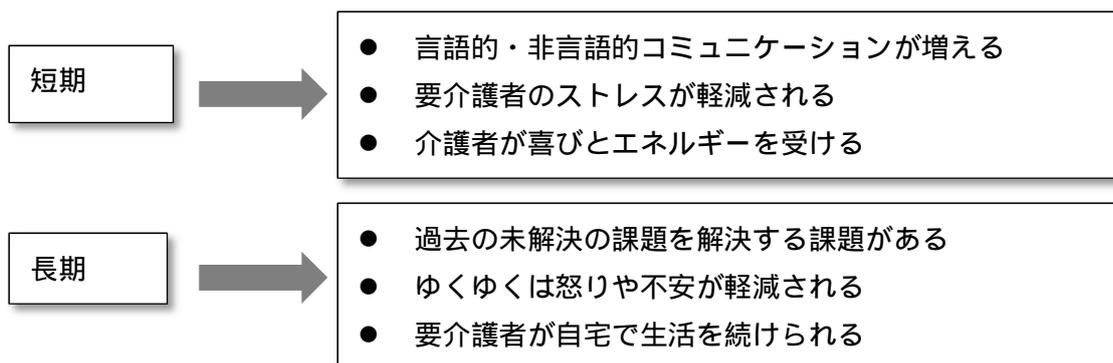
見当識障害のコミュニケーションの上で理解しなければいけないこと

- ・たとえ見当識障害があっても、普遍的な欲求をもち続けている事。
- ・自分が属する世界をもち、自分らしさを見つけ、自分の感情を表現したいという欲求をもち続けている事。

後期高齢者は、孤立した状態で、解決の激しい痛みを乗り越えようと苦しむ。

理解できない行動にどう対処していいのか途方にくれている介護者や家族には挫折や苦痛の元となる。

## バリデーションのゴールについて



## 解決ステージの段階

第1段階： 認知の混乱

第3段階： 繰り返しの動作

第2段階： 日時、季節の混乱

第4段階： 植物状態

## エリック・エリクソンのライフリスク論について

- 人生の各段階では、その時に向き合わなければならないそれぞれの個別課題がある。その課題と奮闘し、成し遂げたとき、次の課題に行くことができる。しかし、未解決の問題は、その後の段階に非常に厳しい影響を及ぼす。
- 人はその人生の中で様々な課題に突き当たりながら生きている。その課題を十分に解決できず、不幸にして高齢期に認知症になった時、そのことが心の中でやり残した課題として深く残っていて、それが問題行動として浮かび上がってくる。

### 未解決の課題

高齢期における喪失体験（肉親との死別）

若いころ、戦後の混乱期で十分な育児ができなくてなくなってしまった。【若成人期における孤独】

### 問題行動（BPSD）

常に人を探してうろうろ歩き回るようになる【徘徊】

人形を娘にたとえ、常時持っており、人形に語りかけている。

## バリデーシンの原則

バリデーシンの理論と実践は、以下の人間主義的な基本的理念（原則）に基づいている。

すべての認知症高齢者は、一人ひとりが唯一の価値ある存在である。

「認知の混乱」の段階にいる認知症高齢者も見当識障害のある認知症高齢者も、あるがまま受け入れ、認知症高齢者を変えようとしてはならない。

共感をもって聞くことによって、信頼が生まれ、不安が減り、尊厳が回復される。

つらい悲しみの気持ちは、信頼できる聞き手によって認められ、バリデーシオンをされることによって癒される。

つらい苦しみの気持ちは、それを無視されたり禁止されたりすると、より強くなる。

「認知の混乱」の段階にいる認知症高齢者や見当識障害のある認知症高齢者の行動には理由がある。

言語能力や最近の記憶が失われてくると、若いときに身につけた行動が蘇る。

「認知の混乱」や見当識障害のある認知症高齢者が使う個人のシンボルとは、思いのつまった過去の人、もの、概念の代わりとなっている（現在の）人またはモノ。

「認知の混乱」にいる認知症高齢者や見当識障害のある認知症高齢者は、しばしば同時にいくつかの気づきのレベル（意識レベル）にいる。

五感が衰えてくると、「認知の混乱」にいる認知症高齢者や見当識障害のある認知症高齢者は「心の感覚」を使う。

認知症高齢者は心の目を使って過去のことを見たり、過去の音を聞いたりする。

ある出来事、感情、色、舌、匂い、味、映像によって、ある感情が湧きあがり、それが引き金となって過去に経験したことと同じような感情が蘇る。認知症高齢者は、今も過去と同じような反応の仕方をする。

「認知の混乱」の段階にいる認知症高齢者や見当識障害のある認知症高齢者の行動の根底にある理由は以下の基本的欲求（ひとつまたは複数）である可能性がある。

・安らかな死を迎えるために、まだやり終えていないことを解決する欲求
・平和に暮らす欲求
・視力、聴力、身体的自由、記憶力が低下したとき、バランスを保とうとする欲求
・忍び難い現実を納得のいくものにする欲求。なじみのある人間関係を持ち、居心地がよいと感じられる場所を見つける欲求
・承認、地位、アイデンティティ（自己・自分らしさ）自尊心への欲求
・役に立ち、有益でありたい欲求
・傾聴され、尊重されたい欲求
・感情を表現し、聞いてもらいたい欲求
・愛されたい欲求、所属欲求：人と接したい欲求
・動けなくされたり、拘束されたりすることなく、温かく育まれ、守られ、安全で安心していただける欲求
・感覚刺激の欲求：触覚、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、性的欲求
・苦痛や不快を軽減したい欲求

#### バリデーション【認知症高齢者とのコミュニケーション】を行う介護者の心得

**認知症高齢者は、壊れた関係を修復するために過去に戻る必要がある。**

介護者はそれをあるまじき行動と判断してはいけない。身体、社会、精神・心理的な状況からみれば、認知症高齢者の行動は癒しであり、過去を引き出すことは役に立つことなのだ。

**バリデーションは、すべての行動には理由があるという考えに基づいている。**

見当識障害のある認知症高齢者がなぜそのような行動をするのかを理解し、その行動をあるがままに受け入れるのが認知症高齢者にバリデーションを行う鍵となる。

**介護者は、その人の身体的な衰えを受け入れ、その人の世界に入り、認知症高齢者にとって信頼される存在となること**



**認知症高齢者は安心し、言葉や言葉以外の方法でコミュニケーションを始めるようになる。**

**認知症高齢者は、壊れた関係を修復するために過去に戻る必要がある。**

## シンボルについて

### BPSD

### 意味するところ

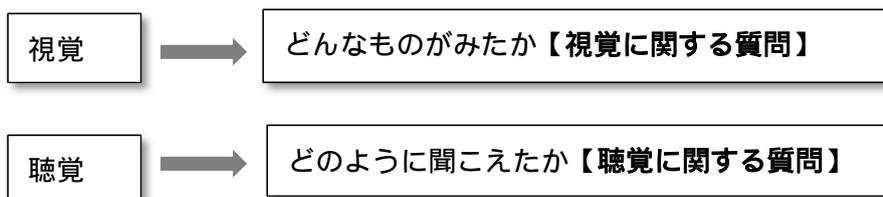
布・バック	財布・バッグが盗まれた	→	主体性、女らしさを認めてほしい、
宝石、洋服	宝石・洋服を触っている。盗まれた	→	自己の価値、自主性を認めてほしい
手・指・人形	手、指を繰り返し常にしゃぶっている。 または人形を触っている、手放さない	→	子供、赤ちゃんの育児ができなかったから今、それを満たすためにしている。
布	布を繰り返し触っている	→	若いころ、十分な育児ができなかった、子供服を作ってやれなかったので、せめて1着だけでも作ってやりたい
動作	規則的な揺れの動き	→	安全性、楽しみ、母性（母親）を求めている

バリデーション・ワーカーコース研修資料

## 基本テクニックについて

### オープンクエション（開かれた質問をする）

- いつ、どこで、誰が、何を、どうした の質問を行う。  
**\*なぜとは聞かないこと！**
- 感情に焦点を当てた質問をすること（心に焦点を当てた質問をすること）  
「大声で叫ぶ」 「叫ぶことでどんな気持ちになるのか」「どんな気持ちで叫んでいるのか」  
「ふきんが汚れている」 「ふきんが汚れていたらどんな気持ちになるのか」
- 感覚に即した質問を行う事



### 反対のことを質問する

- ・ 反対の事を想像してもらうことにより未解決な課題、感情を表出してもらう 解決方法を思い出す。
- ・ その人が訴えている SOS を共有する

## 事例

85歳の女性が、夜になると男性が自分の部屋に入ってくると訴えます。

「昨晚、あの男が戻ってきたの」

介護者はその男が現れなかったときについて考えてみるよう尋ねます。

「彼が来ない晩はありますか？」

「そういえば、あなたが来てくれたあの晩は、あの男は一度も現れなかった。でもあなたが帰ったとたん、私が一人になったとき、また彼が現れたの」

「つまり、あなたが一人になると男が来るのですね。私がいつも一緒にいれば、彼があなたを煩わせることはないの？」

彼女の言葉をリフレージング

「そうね。私はこれまで人生の中で一人になったことはなかったの。夫がいつも一緒にいてくれた。夫が亡くなったときは身の毛がよだつようだったわ」

「ご主人が亡くなった後は、何をしたのですか？」

「とても怖くて、夫の写真を全部出してきたの。夜になると、彼の好きなワルツをかけた。夜通し夫の写真を見つめて、彼の好きだったワルツを聞いていたわ。そうして夜を過ごしたのよ」

### この事例から言えること

男が現れないときの状況について考えるよう介護者が促す



・その女性は若いときに同様の状況にどのように対応してきたかを思い出し、女性と介護者が一緒に写真を探し、一緒に女性の夫について思い出話をするようになる。



彼女は、自分が一人ばっちになる恐怖心に対処してきた自分にとってなじみのある対処方法を取り戻す

### 極端な表現を使う（最高、最低の場合を聞く）

このテクニックでは、その人のもっている不平・不満のもっとも極端な状態を考えさせるような質問をすることにより、最悪な状態を考えると、バリデーションを受けている人は、自分の感情をさらに表現しやすくなる。感情を出すことでそうした気持ちを幾分か軽減することができるようになる。

#### 例

「この料理は食べられたものではないわ」と不満を言っている女性の場合

「これまで食べた中でそれが最悪の鶏肉ですか？」



その人がフラストレーションを感じているのは、実は入れ歯が合わないことであることを、この介護者は知っている。  
その人は自分の怒りに耳を澄ませてくれる誰かが必要なのだ。  
食べ物について不満を言って、怒りを放つことによって、介護者はその人の不安を和らげる援助ができるのだ。

### あいまいな表現を使う

第2段階「日時・季節の混乱」にいる人と第3段階「繰り返し動作」にいる人の一部は、他の人には何の意味かわからない言葉を使うことがある。

介護者は曖昧な表現を使うことによって、「日時・季節の混乱」にいる人が何を言っているのかわからなくてもコミュニケーションができる場合が多くある。

### 事例

「日時・季節の混乱」の段階の人が、「あのキヤツタウオークに困ったの!」と叫んでいるとき

介護者が「どこでそれに困ったのですか?」と「それ」という代名詞を「キヤツタウオーク」という不明の言葉の代わりに使う

「おんととー...したの」と言う「日時・季節の混乱」にいる人に対し、「それは楽しかったですか? 彼らは何か言いましたか?」と質問する



「彼」「彼女」「それ」「誰か」「何か」などの言葉が、辞書にはない言葉を補う - それによって「日時・季節の混乱」にいる人はコミュニケーションを続けることができ、さらに植物状態へと引きこもっていくのを防ぐことができる。

### 音楽を使う

聞くことで表情が豊かになる。または昔のことが思い出される。

乳幼児のころに聞いた音楽



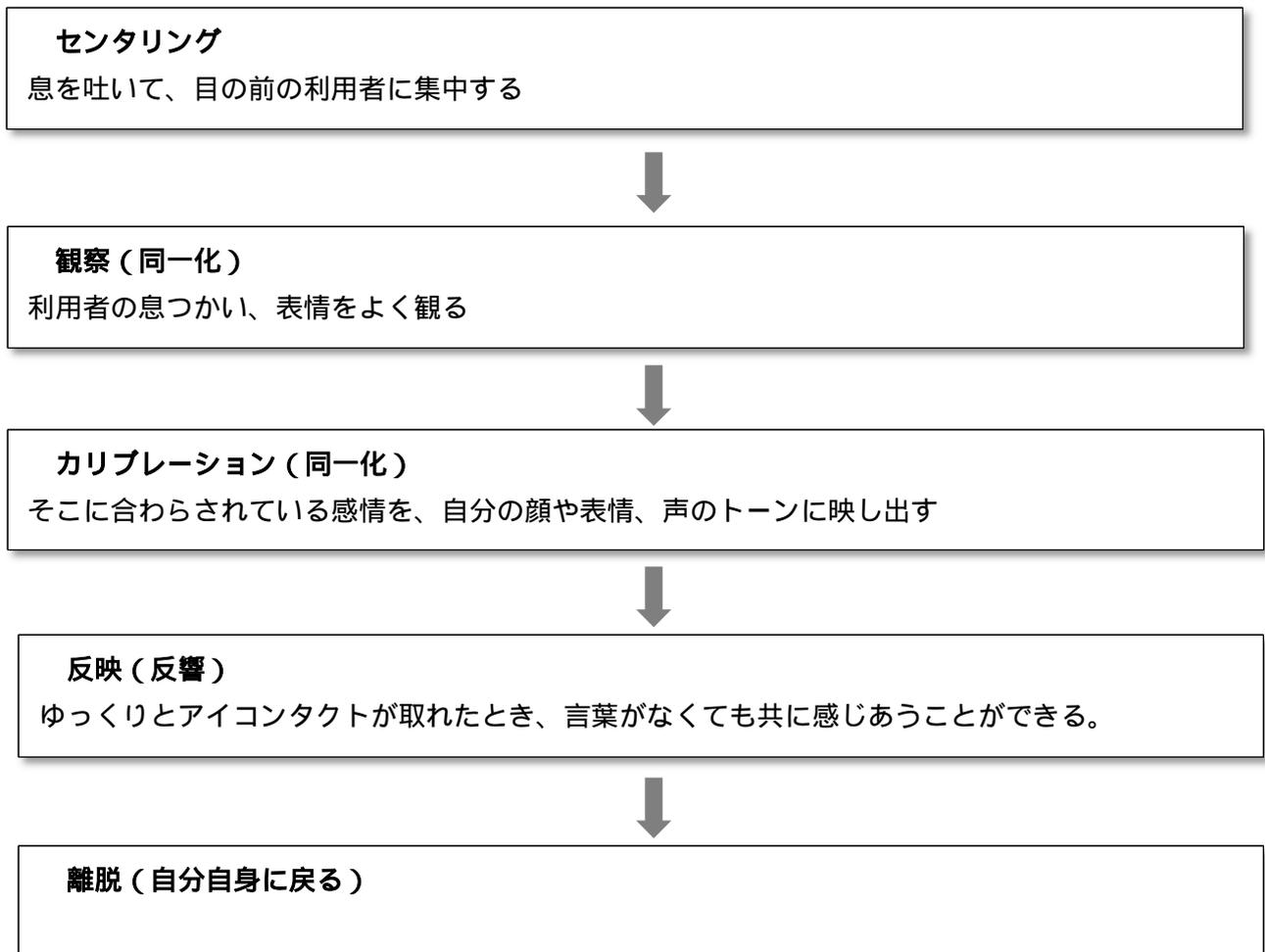
心地よい

18~20歳ごろに聞いた音楽



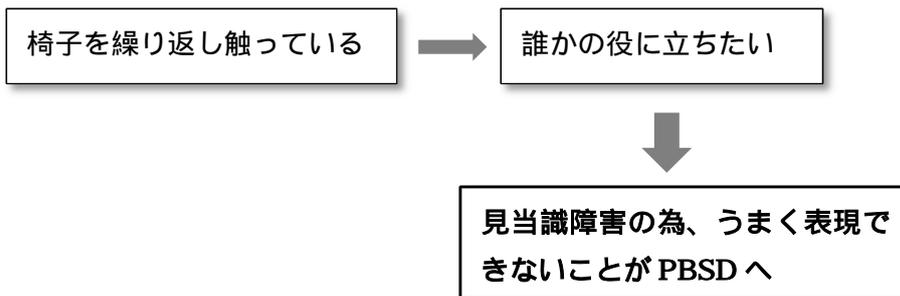
印象に残っている

## バリデーションの過程について



## PBSD について

### 誰かの役に立ちたい



### 怒りの表出について

バリデーショを行うことで表出してくるもの

- 利用者の多くは日常生活においては怒りを表出せずに抑えることが礼儀正しいと思っている。つまり怒りの表明は「悪」と考えられているのでたしなめられたり、非難されたりする。
- 怒りの感情を表出することができないために、こだわりを捨てきれず、自分の見方を変えたり、考え方を変わる機会を失ってしまう。

## 各ステージの段階にいる認知症高齢者の心理的・行動的特徴

### 「認知の混乱」第一段階にいる高齢者について

過去に向き合ってこなかった感情を今表現するのに苦しんでいる。

バリデーションの心得のある介護者は、そうした彼らの姿を妄想ととらえず、未解決の葛藤の苦しみをやわらげようとしなければならない。お年寄りは今の現実世界で経験している喪失がきっかけとなり、以前経験した喪失を思い出す。

「認知の混乱」の段階にいる人は、あまりにもたくさんの喪失に対応するために人を非難しているのだという事を理解しておかなければならない。

### (1) 特徴

- ・「認知の混乱」の段階にいる人は、加齢と共に起こってくる身体的、社会的喪失を受け入れることができない。
- ・「認知の混乱」の段階にいる人は、これまで重要な「人生の課題」に向き合ってこなかったため「人生の課題」とは、以下のとおりである。

「自己の確立」	「喪失を受け入れること、特に加齢と共に遭遇する喪失を受け入れること」
「親密さの獲得」	「新しい活動に加わること」「自我の統合に到達すること」
「適切に感情や行動をコントロールできるようになること」	「現在のこと、過去のこと、将来もかなわないことを受け入れること」
「他の人を信頼すること」	

- ・「認知の混乱」の段階にいる人は、日常生活のほとんどは普通に行動しているが、現実の世界では正しくないようなことを繰り返し言うことがある。

### (2) 「認知の混乱」の段階にいる人の身体的特徴

- ・目はくもりなく、はっきりし、焦点を合わせている
- ・筋肉は緊張気味
- ・あごは突き出し気味
- ・腕を組んで座る、あるいは立つ
- ・目的をもった動作をする
- ・声は甲高かったり、不機嫌だったり、辛辣だったりする
- ・話し方ははっきりしている
- ・最近の記憶に関しては、時どき忘れることもあるが、ほぼ保たれている
- ・読み書きの能力は保たれている
- ・認知能力は時間を正しく言う能力を含めてほぼ保たれている
- ・時どき尿失禁がある

### (3)「認知の混乱」の段階にいる人の心理的特徴

高齢になると、「認知の混乱」の段階の人は人生の最後の課題に直面し、これまでずっと覆い隠してきた感情を表現しなければならない。

#### 事例

少年の頃、パンツを濡らしてお仕置きをされ、恥ずかしく嫌な思いをした



同じ部屋に住んでいる利用者に対し、床じゅう水をこぼすと非難をしたりする。

それは自分が失禁しているのを恥ずかしくて認めることができないから。

**「認知の混乱」にいる人は、現在の人やものを使って、もっと前に表現すべきだった感情を表す。**

#### 事例

80歳の「認知の混乱」にいるある女性の場合

40歳のときに夫を亡くしたが、つらい悲しみの気持ちを決して表に出さなかった。



彼女は、同じ部屋の利用者が結婚指輪を盗んだと主張。



寂しいということを否定したいのだ。気持ちを否定した結果、苦しみを生み出し、それを彼女は自分と同じ部屋の利用者に対して怒ることで対処したいのだ

- ・一般的に比較的充実した生活を送ってきた
- ・ある特定の人生の課題を解決することができずに、「人生の解決ステージ」を迎えている
- ・人生をとおして抑えてきた感情を表現する必要がある
- ・嫌な現実を直視したいと思わないし、できない。そしてその喪失を否定する
- ・親密になることを避ける。さわられるのは好きではない
- ・現実の時間と場所にしがみついている
- ・体の機能をコントロールできなくなることを恐れている
- ・精神機能をコントロールできなくなることを恐れている
- ・変化を恐れ、新しい環境にうまく適応することが難しくなる
- ・かつてよく使っていた対処方法を繰り返す
- ・コントロールを保とうとし、コントロールできなくなっていることを否定しようとする
- ・変化に抵抗する
- ・問題に直面することを恐れる
- ・分析されるのを好まない
- ・洞察して理解したいと思わない
- ・介護者に同意してもらいたいと思っている

#### (4)「認知の混乱」の段階にいる人の行動

- ・人を非難する、責める、めそめそする、不平を言う

こうしたことは、状況が悪くなると「認知の混乱」の段階にいる人がよく用いる対処方法。

- ・物を集めたり、ハンドバッグや財布、杖、新聞などをしっかり握りしめたりする傾向がある。

年をとると、溺れている人が救命具にしがみつこうように、しっかり根づいた対処方法にしがみつく。彼らは年をとることを恐れている。事態が悪くなればなるほど、非難したり、めそめそしたり、不平を言ったりすることが増える。

- ・「認知の混乱」の段階にいる人は、盗んだ、毒を入れた、スパイしていると言って他人を非難し、自分の怒り、苦しみ、性的な恐怖心などをやわらげようとしている。

自分の生活へのコントロールを取り戻そうと、失ったもののシンボルとなるものをためこんでいくことがよくある。

- ・トイレットペーパーを集め、失禁への恐怖を表現したり、鉛筆や紙を集めて書く能力を失う恐怖心を表現したり、鍵を隠して家を失うことや運転する能力を失うことへの不安を隠したりする。

- ・長い間抑圧してきた感情を表現するために、他人を責めていた

- ・現在の喪失体験がもたらす恥ずかしさや罪悪感や不適切な感情に苦しみ、それがきっかけで過去経験した同じような感情が蘇った

#### 「日時・季節の混乱」第二段階にいる高齢者について

- ・「日時・季節の混乱」にいる人は脳の側頭葉を使って過去の像を復元することがよくある。

- ・脳の側頭葉はずっと前の音やにおいの記憶を蓄えている。

そのため「日時・季節の混乱」にいる人は、過去に聞きなれた声を聞くことがある。

- ・幼い頃に心に刻み込まれた記憶は、一般的にもっとも長く保たれているため、お年寄りには遠い過去の出来事を思い出すことが多い

##### 事例

ある 90 歳の女性は、自分がたった今食事をしたばかりだということを忘れてしまうが、自分の子どもに食事をさせなければならないということだけは覚えていたりする。

- ・「日時・季節の混乱」にいる人は、分類する能力を失っている。

脳損傷がない人であれば、椅子やテーブルや机等を家具として認識できる。またオレンジ、リンゴや梨を果物の種類だと認識できる。しかし、「日時・季節の混乱」にいる人はもはや梨やリンゴを果物という種類に分類できない。

- ・実在するものと単に象徴的なものとの区別ができない。

母親でいたいと思っている「日時・季節の混乱」の状態にいる人には、赤ちゃんのように柔らかな手そのものが、赤ん坊になるのだ。亡くなった妻を恋しく思う男性には、娘が妻になる

脳梗塞やアルツハイマー型認知症による老人斑や神経線維変化によって大脳への損傷が起こり、分、時間、日、週といった時間の単位で考える能力を失っている

## (2)「日時・季節の混乱」にいる人の心理的特徴

- ・ スタッフの識別ができない。自分の家族を認識できないことがよくある
- ・ 名前を忘れる
- ・ 現在の人と過去を人の区別ができず、混同している
- ・ 最近の記憶は弱いが、遠い過去のことは鮮やかに思い出す
- ・ わびしい今の現実と退屈さから逃げるために、現実から逃避し、過去のなじみある光景を追体験している。それは解決しようと葛藤している過去である場合が多い
- ・ ものを人の代替として使う
- ・ ものを類別・分類することができない
- ・ 読む能力は保たれているが、書き方を忘れることが多い
- ・ 注意を集中できる時間が短い
- ・ なじみのある歌は覚えているが、歌うと音程がはずれていることがよくある
- ・ ビンゴのようなルールのあるゲームができない
- ・ 自分の感情をコントロールできない
- ・ 愛の欲求やその他の感情を自由に表現する
- ・ 介護者の願いに合わせようとするつもりはなく、しばしば規則に従わない
- ・ 直感的な知恵は保っている
- ・ 心からの介護はわかる
- ・ 反論する介護者や同意したふりをする介護者を信用しない

## 「繰り返し動作」(第三段階)にいる高齢者について

言葉を使い始める前の子どもの頃のような動きや発声にまで退行していくことがしばしばある。



自分自身を守るため、また感情を表現したいという基本的な人間の欲求を満たすため

- ・ 社会的コントロールを失っており、もはや自分の感情を隠そうとはしない。
- ・ 抑えていた感情を解き放つことで、自分自身を癒そうとする。
- ・ 「繰り返し動作」にいる人は、体の一部や、人やものを使って、過去の重要な人や出来事を表現する。



### 事例

保険の外交員をしていた人にとってはスーツケースが書類鞆になる。

- ・ コミュニケーションの方法として、体の動きが言葉にとって代わるのだ。
- ・ 「繰り返し動作」にいる人は自己認識ができない。
- ・ 「繰り返し動作」にいる人は、鏡に映る自分の姿をもはや認識できないほど自己が不明瞭になる。そして、感情は外にこぼれ出るようになる。他の人から見れば不適切だと思ふような形で、流れ出す。
- ・ 幼いときに覚えた動作が言葉から置きかわる。理性的な思考ができなくなり、非言語的な表現を使うようになる
- ・ 動作が感情を呼び起こす。言葉は理解不可能なものになる。
- ・ 唇、舌、顎、歯が勝手気ままに動き、新しい言葉を作り出す。

- ・「繰り返し動作」にいる人の行動には理由がある。



自分の体がどこにあるのか、もはや脳は伝えていないが、記憶は鮮やか。  
現在のわびしい現実を切り抜けて生きていくために、幼い頃に定着した動作を蘇らせている。  
「解決」の段階「繰り返し動作」にいる人は、そうやって喪失に対処し、尊厳を取り戻そうとしているのだ。

- ・「繰り返し動作」にいる人は、自分の行動を制止しようとする介護者を無視する傾向にある。

### (1) 身体的特徴

- ・理解できる文章で話せない
- ・幼い頃に覚えた音を繰り返す。たとえば、舌打ち、うめき声、歌声など
- ・繰り返しの動作で感情を表現する
- ・タッチング、アイコンタクト、声の調子を通して、刺激を受けたときにのみ反応する
- ・声は低く、メロディーのような音調。あるいは甲高い声
- ・泣いたり、ドンドン叩いたり、同じ調子でうろうろ歩いたり、しきりに体を揺り動かしたりする
- ・目は半分閉じている。あるいは焦点が定まらない
- ・動作はとてもゆっくりになる
- ・尿失禁がある
- ・読み書きの能力が失われる
- ・歌う能力は残っている
- ・自分の体の状態がわからない

### (2) 心理的特徴

- ・ごく幼い頃の経験は思い出せるが、最近の記憶を保つ能力がない
- ・名前や顔を思い出せない
- ・注意力が持続しない
- ・護者のタッチングと声を覚えている
- ・感情を一切コントロールしない
- ・外界との交流から身を引いて閉じこもっている
- ・自己認識ができない

家に帰るといって騒ぐ入所者に、職員は疲れ果ててしまった

Aグループホームに入所して2年の田中さん(80歳・女性)は認知症が原因で家族の介護が困難になり、入所に至る。

現在、夜間就寝後、真夜中になると毎日と言っていいほど、頻繁に宿直者を起こし、家に帰らせてほしいと訴える。時には暴力をふるうこともあり、職員はほぼ全員が彼女への対応に苦慮していた。

日中も夕方になると家に帰ると言い出してきかず、その時には一人の職員が彼女について外出し、本人が納得すると施設に戻るということを繰り返していた。

そのため、職員は皆疲れ果ててしまい、彼女のことを受容し、共感するといったことができにくい精神状態に陥っていた。

ある日、相談を受けたバリデーションワーカー(以下・W)がAグループホームを訪れ、田中さんにバリデーションを実施。その日も食堂で昼食後、家へ帰るといって大声を出しはじめた田中さんに・Wは静かに近づき、話しはじめた。

.....

・W「こんにちは、田中さん。何かお困りですか？」

それに対して田中さんは声を荒げて、

「何やって？ あんたは私が不平不満を言ってるって言うのか！失礼な！

私は一度たりとも周りの人に文句を言ったり、迷惑かけたりしたことなんかないんや！」

と言って、・Wに手をあげようとした。

それを何気なくそっとやりすごした・Wは穏やかな表情から、少し田中さんの表情を真似ながら

ミラーリング

「そうですね。田中さんはいつでも周りの人に迷惑をかけないように生きてこられたのですね」

と田中さんの言葉を反復した。

リフレージング

すると田中さんは少し表情をゆるめて、

「そうや、私は誰にも迷惑なんてかけてない」

と言い、・Wの顔を見つめた。

アイコンタクト

・Wはそっと田中さんの肩に手を当てて

タッチング

「そうですよ。がんばってこられましたね。もう少し詳しいお話をお部屋で開かせていただけますか？」  
と言った。すると田中さんは・Wの手を取って、自分の部屋に案内し導き入れた。

自分はベッドに腰かけて、その正面に座ろうとする・Wに横に座るように言った。

「田中さんはこれまで、誰に迷惑だけはかけてはいけないうって懸命に生きてこられましたね」

と・Wが言うと、田中さんは大粒の涙を流しはじめ、「自分は嫁として姑に尽くしてきた。そのことを誰も理解してくれない。どれほどつらい毎日だったか。あんただけがわかってくれた。ほんまにありがとう」など語った。

その間、・Wは田中さんの背中をやさしく撫でつづけた。

すると、「おやつ時間やし、おやつ食べるわ」

と、田中さんはまるで何もなかったかのように立ち上がり、10分ほどして部屋を二人で出たときには、田中さんは笑顔であった。

田中さんは、その日は、家へ帰るとは言わなかった。

グループホームの職員は、「どんな魔法を使われたのですか!？」と驚いていた。

その後、グループホームでは、田中さんへの対応をもう一度見直しをすることになった。

会議を重ねて自分たちの態度・方法を反省し、

- できるだけ受容的な態度で臨むこと、
- 「帰りたい」と訴えが出たときには、可能なかぎりひとりの職員が彼女の訴えに向き合い、丁寧に傾聴して、訴えの奥にある彼女の感情が表に出るよう支えることを確認した。

.....

### 【考察】

人様に迷惑をかけている自分自身を許すことができない

この事例においては、バリデーションワーカーによる「そうですね。田中さんはいつでも周りの人に迷惑をかけないように生きてこられたのですね」の言葉が大きな鍵になっている。

これはバリデーションのテクニック「満たされていない欲求と行動を結び付ける」にあたる。

この利用者の過去の生活歴と観察から、バリデーションワーカーは、「迷惑かけたりしたことなんかない!」と暴れる利用者の行動は、「迷惑をかけつづけてのみ生きられる存在」である「認知症者」になってしまったことに対する罪悪感と、さまざまな能力や家族、愛情、感情表出など、奪われていくものへの大きな喪失感の現れであり、さらにあるライフ・ステージにおける未解決問題への奮闘であると理解した。

「私は人様に迷惑をかけてはいけない、と言われつづけて生きてきたのに、今はこのようになってしまった.....」と表現したいのだと理解し、このような言葉を述べたのだ。

田中さんは子どもの頃から、「人様に迷惑をかけてはいけません」「ひとりで勝手なことはしてはいけません」と、自由奔放な活動の経験をほとんどせず育てられたのかもしれませんが。さらに、成人してから嫁いでも、同様に、さらに厳しい規制を要求されたのかもしれない。

そうであれば、今、ケアを受けつづけることで「人様に迷惑をかけている」自分自身を許すことができない、そういった状況にあるのではないだろうか？

彼女は人生最期のステージにあり、「許せない、最悪な状況」下で、生まれて初めて人様に迷惑をかける経験をし、生まれて初めて思いっきり感情を表現する経験をしているといえるのかもしれない。

このように、施設の中で対応困難とのレッテルを貼られていたり、あるいは困難事例としてあげられてす  
らおらず、「わがままな利用者」「暴力的な興奮しやすい利用者」として十分な対応がなされないまま、悪  
循環のケアが続けられているケースは、よく存在するのではないだろうか？

介護労働安定センター福岡支部主催  
バリデーション研修資料より抜粋

生涯発達理論と見当識障害の関係・具体例一覧

ステージ	人生課題	課題がクリアできた事例	課題がクリアできなかった事例	見当識障害に現れる BPSD
乳児期	基本的信頼 vs 基本的な不信	母親は私たちが寒い中ほったらかしにしないという信頼を学ぶ。 母親の胸の中、温かな安心した気持ちで、身をゆだね、ゆっくりとおっぱいを飲んでいる。母親は決して置き去りにしない、私は愛されている、母は私を見捨てることはない、寒くても、空腹でも、怒りや恐れを乗り越えて待つことを乳児は学んでいく。	育児放棄され、一人ぼっちにされたとするとあつという間に見捨てられてしまい、空腹と寒さで震え、怒りで顔を真っ赤にして泣き叫び人間を信じることができなくなる。 相手に意思表示しなくなる。	非難、絶望的、無力、無益、新しいことを全て恐れ、感情を呑み込む
幼児期	自律性 vs 恥、疑い	ルールに従うことに大きな喜びを覚える。 乳児期に信頼を学んだ子どもは、転んで泣いても、自分で立ち上がり、もう一度自転車に乗ろうとする。「ほら！乗れたよ！」 その子どもは何度も転ぶかもしれないが、立ち直れなくなることはない。幼児期には、乳児期に学んだ信頼を応用しているのだ。	親が私たちに繰り返し完璧さを求めてきた場合、汚さないように、こぼさないように、転ばないように、泣かないように、傷つけないように、忘れないように、などと言われ続けたら、子どもは自律という課題を習得できず、背中にさらにもう一つ荷物を背負いこむことになる。	厳密に制御しなければならないという気持ちを高齢になるまで抱え、自分の感情をあらわにするのを恐れ、自転車のハンドルをいつまでも強く握り続け、自分のもっているものにしがみつき、思いを胸に秘めてしまう。
思春期	アイデンティティ vs アイデンティティの混乱  課題は「反抗」	「反抗」という親とつながる紐を断ち切ることが課題となる。15歳になる頃、大好きだった母親は意地の悪い魔女に変身し、父親は恐ろしい大蛇になり、権威の激しい炎を吐き出す。15歳で私たちは自分自身の価値を見つけるために親から離れる闘いをしなければならない。自分が何者であるか(アイデンティティ)を見出すために、一番身近な人たちと闘う。自分がどれほどかけがえのない存在なのかを知るための闘う。しかしすでに私たちは乳児期に、両親は反抗しても愛してくれることを学んでおり、反乱を起こすことができる。	両親から無償の愛を受けていないと、闘いを挑み、規則に従わないと、父親も母親も愛してくれないかもしれないと感じる。そうすると孤独になってしまい、降伏するほかないよい子でいようとし、いつもお母さんとお父さんの望むとおり振る舞うようになる。	自らを主張して拒絶されることを恐れ、自分自身であること価値のある存在となるためには、他人にとって意味のあるものにならなければならないと思うようになる。 年をとるにつれて背中の荷物は重くなり、そして絶えず苦しむ人になる。

若 成 年 期	親密（親しくなること） vs 孤独	親密性を求めるようになり、誰かに「愛しています」とささやき、拒絶されるのを恐れることなく、触れたいと思うようになる。 もし自分が何者であるかははっきりと意識して、それが自分の内面深くから生じているものだったら、人に傷つけられる危険も冒すことができるそれでも私たちは壊れてしまうことはない。	前の発達段階の課題を習得していなければ、親密性を求めることはできない。 幼児期に自分を信じて自転車のハンドルを放すことができなかった人が、成人期になってどうやって自分を信じて人生のでこぼこ道乗り越えていくことができるのだろうか？	乳児期に棄てられた恐怖、子どものとき失敗した苦しさ、思春期に拒絶された恐怖心に絶えず悩まされ、他人と離れ、孤立し、引きこもっていくことになる。
成 年 期	生殖性(生み出す) vs 沈滞(停滞)  課題は「人生の危機を交わすこと」	しわが深くなり、髪はうすくなる。しわだらけの皮膚は骨となじまない。目の下のたるみがとれない。鏡を見ると、5年前と変わらないように見えるけれども、すべてが下がってきている。次々と喪失に遭遇する人もいる。配偶者に先立たれる、乳房切除、腎臓切除、仕事を失ったりもする。喪失に直面し、嘆き悲しみに暮れる。 しかし鏡の中の自分を見て、人生が永遠には続かないことを受け入れる。人生のレパートリーを広げ、人生のピアノに、新しいキー（鍵）をつけ加え、前進し続ける。妻が亡くなれば、親しい友人を見つけ、仕事を失えば、ボランティアの仕事を受け入れる。	すべてに完璧さを求め、自制心を失ってはならないと学んできた人は、自分の感情を誰にも漏らすことができない。 配偶者を亡くしたり、仕事を失ったりすると何も価値のない人になってしまう。それに耐えるために、喪失による影響を否定する。 新しいキーを覚えるリスクを冒すことができず、同じキーを叩く。過去の古びた役割にしがみつくと。妻を失った男性は、妻に代わる人はいないとって新しい人間関係をもつことを拒否する。音楽が好きな人が、高すぎるからとって補聴器を買うのを拒絶する。 会社の重役だった人は、引退後も自分の時間は金銭的価値があるといってボランティアを馬鹿にする。	現在のステージに立ち往生してしまい、人生の次のステージに進む準備ができない。過去の行動様式にしがみついている。依存する。
老 年 期	成熟（統合） vs 絶望、嫌悪	人生で成し遂げてきたことについて満足し、死を迎える準備をする。たとえ果たせなかった夢や失敗があったとしても、自尊心をもって死を迎える。私は女優になりたかったけれど、なれなかった。でも私は自分の演技力を使って、よい教師になれた。自分の夢はかなわなかった、いろいろ失敗もしてきた、今の自分、過去の自分、なることができなかった自分を受け入れることができる。	自分を受け入れることができず、目がかすみ、髪が薄くなり、忘れっぽくなくても愛される存在だと信頼できなかつたら、落胆し始める。激しく次々と襲いかかる喪失に打ち勝てるだけ深く自分を受け入れることができなければ、つらい気持ちになり、落胆し始める。	落胆した気持ちは、それが無視されると、中でとどろき始め、うつ状態に陥いる。うつ状態は、人間の内面で感情がかんしゃくを起こした状態。怒り、反抗心、羞恥心、罪悪感、愛情など、生涯押し殺してきたものが化膿してくる。年をとり、背中に背負った荷物が耐えきれもないものになる。